

# 歩く江戸の旅人たち

## スポーツ史から見た「お伊勢参り」 谷釜尋徳著

八柳 修之



筆者は東洋大教授、日体大大学院博士課程修了の博士、専門はスポーツ史。本書では従来の旅行史研究にスポーツ史的な発想を取り込み、近世後期の庶民の旅と歩行の実際を様々な角度から、日本的なスポーツの原風景を明らかにした書である。2020年3月初版、晃洋書房発行

以下、摘記します。

近世、泰平の世の中になると庶民の間に旅という行動が広まった。伊勢神宮参拝、60年周期のお蔭参りという集団参拝である。最大規模だったのは、**文政13年(1830)のお陰参りで3月末から6月20日までの間、約427万人**に達した。

当時の日本の人口は約3,000万人、そのうち武士や公家、僧侶などを除いた庶民の人口は約2,600万人、庶民の6人に1人がお伊勢参りした計算になる。

当時、庶民が旅行する場合は身元を保証する往来手形と関所の通行を願い出る

関所手形が必要であった。手形には旅の行き先として各地の寺社の名前を記載する必要があり、特に伊勢参のほかご利益があるという寺社を目的とすれば容易に許可された。多くの場合、信仰は口実で目的は遊楽にあったという。また奉公人であっても雇い主の許可がなくとも咎められることなく許可された

庶民にとっては一生に一度のお伊勢参り。これを機会の足を延ばす傾向が見られた。東国の人には伊勢より大和、京、大阪、四国、はては九州まで。西国の人には、江戸、鹿島、日光、松島、象潟、信州善光寺まで。

筆者は東北地方の庶民が歩いた30の道中記を収集し、旅のルート、歩行距離、旅の服装、携行品、歩き方、懐事情などを調査した。ウォーキングには調査、実行、記録、とりわけ記録の大切さを教えてくれる。

さて、これまで近世の旅人の歩行距離は一日10里(39km)とされてきたが、上記庶民男性の旅日記から**導き出した歩行距離は一日平均34.9km、女性は28.6km**であった。また、歩いた総距離は道中記から**平均2,361km**移動した。最も長い距離を歩いた人は、1857年、岩手県北上市の欠畑某で四国まで足を延ばし104日間、約3,175km。平均一日35.3km、最も長く歩いた一日の距離は70.8kmであった。

伊勢参りの**同行者**の数は旅日記から最小で2人、最多で24人、平均約11人が連れだっている。年齢は最年少18歳、最年長は56才であった。歴史人口学によると18世紀、平均寿命は小児死亡が多かったので30代半ばと言われている。50代の男性は稀有な存在、自然淘汰をくぐり抜けた体力の持ち主であったといえよう。

東海道は日本橋から平均して約9km毎に宿場が設置された。一日約35km歩いたとすれば、最初の宿は程ヶ谷宿、江戸日本橋から32.4kmである。**歩行時間**、宿の立ちは4~7時頃、到着は16~18時頃。時間はどのように知ったか、シーボルトは旅人向けの案内書には地図、道程のほか紙を立てる日時計が付いていたことを挙げている。また時を知らせる寺の鐘のほか、宿場町には時の鐘があった。



**歩き方**は、日本人の歩き方が右手と右足、左手と左足が同時に出る**ナンバ歩き**と呼ばれる農耕民族特有の摺り足であった。**履物**は草鞋、ぴったりと足の裏につきつま先歩行。草鞋は宿場、茶屋で調達、街道には草履売りもいた。

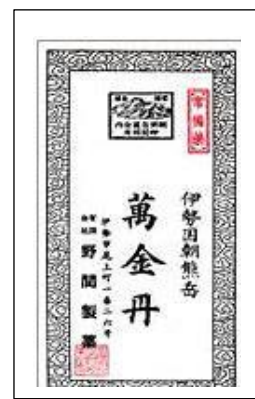
草鞋の値段は平均15文。これは酒や餅と同額で蕎麦(32文)の半額以下であった。草履は耐久性に優れ平均して40~50km程度の間隔で新しい草履と履き替えた。また日本人の旅の必須アイテムとして**杖**、肩運搬での**棒**、棒を使った休息方法があった。杖の携行率は名所図会などから男性は29%と思いのほか杖使っていないが、女性では58%となる。杖の値段は50文程度であったとされる。

草履の値段は平均15文、茶屋での酒、餅と同程度の値段、蕎麦は32文であった。草履は耐久性に優れ平均すれ

ば 40～50 km 程度の間隔で新しい草履と変えた。（挿画はナンバ歩き 無料画像）

**旅行の費用**はどのくらいかかったか。旅の家計簿である。当時の銭一文は賃金で換算すれば、1文 47.6 円、銀 1 分は 84 文で 4,000 円、金 1 両は 6,300 文=30 万円と推測されている。（磯田道史「武士の家計簿」新潮社、2003）

弘化 2 年（1845）、多摩郡喜多見村の田中国三郎が伊勢参宮のほか四国・中国 86 日間の旅をした際、「伊勢参宮覚」の旅費の全容が詳しく記されている。それによると、この旅に罹った費用の総額は 5 両 5 貫 771 文（35,771 文）= **1,702,700 円** と算出される。その内訳をみるとは宿泊費 44% で 15,897 文=757 千円。食費 20%、7,253 文=345 千円。交通費（馬、かご、川越、渡し利用）13%、4760 文=227 千円。この 3 科目で全体の支出の 77%、1,329 千円を占める。残りは土産代、寺社参拝代、遊興費、その他であり、一日あたり約 **2 万円** の支出である。当時、東海道の旅籠賃は 200 文程度（9,520 円）、東海道、戸塚、小田原、吉原など。最高でも箱根の 216 文（10,281 円）であった。江戸からの伊勢参りは通常 2 か月程度だったので、一日 **400 文** を消費するとして **4 両（25,200 文=約 120 万円）** を最低用立てる必要があった。



伊勢土産 萬金丹 胃腸・便秘薬

さて、庶民はどのように高額な旅費を準備したのであろうか。皆で旅費を出し合い数人の代表者を旅立たせる「講」の形式、これを代参講と言った。講とはもともと宗教上の目的のもとに集まった仏僧の集団を意味する語から発生したが、近世になると講の宗教的意義は次第に薄れ、本来の精神を逸脱して、宴会や行楽を主とする集団に変わっていった。例えばお伊勢参りをしたいという者が集まり講金を積み立て、毎年、伊勢参りする人を選び 5 年程度で全員、伊勢参りするというシステムである。伊勢講を広めることに一役買っていたのが「御師（おんし）」と呼ばれる僧侶であった。伊勢には多数の御師がいて、それぞれ日本各地に縄張りを持っていた。御師は地方に出張してきて伊勢参りのご利益を説き、旅費の調達手段として伊勢講の結成を促すなど営業努力を怠りなかった。伊勢参りの際には、御師は自ら宿の手配、ツアーコンよろしく現在の旅行社のような存在であった。

明治の世の中になり近代化が進むと日本人の旅は大きく変わった。鉄道の登場により、歩く旅は次第に姿を消していった。明治 5 年（1872）の新橋～横浜間の鉄道の開通に始まり、明治 22 年（1889）の東海道線の全線開通である。男性が 2 週間以上かけて歩いた東京～神戸間をたった一日で結ぶ汽車の存在は、旅のあり方にも影響を与えていったのであった。明治 29 年（1896）に岩手県花巻から伊勢参宮した菅原豊治等 10 名の記録によると、関西まで足を延ばし 57 日間の旅行をしているが、東京での滞在が長く見学先も浅草、霞が関の官庁などと変わってきている。歩き方も富国強兵を反映してナンバ歩きから西洋式になり、軍隊ではしばしば行軍が軍楽隊の行進曲にのせて訓練された。私が FWA に入会した 1997 年当時のウォーキングは先頭が大旗を掲げ、参加者はぞろぞろついて行くものであった。蛇足次いでに私の母校、盛岡一高（旧制盛岡中学）の校歌は軍艦マーチに生徒が歌詞をつけたものである。作詞能力はあったが作曲を依頼するお金がなかったのか？ 軍国主義の結果は東条内閣の A 級戦犯、板垣征四郎（陸相、死刑）米内光政（海相）を出した。以上 挿画はいずれも無料画像